



山田方谷における気其自然性と形而上的理の解体 : 形而上下から形而前後への転換

原田, 勉

(Citation)

国民経済雑誌, 228(3):1-10

(Issue Date)

2024-09-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491618>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491618>



国民経済雑誌

THE
KOKUMIN-KEIZAI ZASSHI
(JOURNAL OF ECONOMICS & BUSINESS ADMINISTRATION)

山田方谷における気の自然性と
形而上的理の解体
——形而上下から形而前後への転換——

原 田 勉

国民経済雑誌 第228巻 第3号 抜刷

2024年9月

神戸大学経済経営学会

山田方谷における気*の自然性と 形而上的理の解体

——形而上下から形而前後への転換——

原 田 勉^a

山田方谷の陽明学思想はかれの藩政改革の成功にどのように結びついているのだろうか。本稿では、形而前、形而後の勢いという新たな視点からこの問題の検討を行う。形而前の勢いとは対象となる形が生成する以前の目的、意図、働きであり、形而後の勢いとは形が生じた後にそこから派生する勢いのことを指す。本稿では、方谷が主張する気*の自然性を、形而前、形而後の勢いの整合性として定式化する。そこに不整合があればそれは気の執滞であり、それを是正することが格物となる。これが山田方谷の藩政改革を主導した陽明学*の原理であり、具体的にはゼロサムゲームからポジティブサムゲームへの転換・創出、すなわち方谷の主張する絜矩の基準の徹底であったというのが本稿の基本的な主張である。つまり、形而前の動機のみならず、形而後の帰結にも着目し、両者の絜矩の基準による総合を目指す点に方谷陽明学の特徴が認められるのである。

キーワード 山田方谷、気*の自然性、形而上的理の解体、形而前後の一貫性、
絜矩の基準

1 はじめに一問題の所在

山田方谷は陽明学を独自に発展させたおそらく日本最後の陽明学者であり、なおかつ、その学問を実践に生かし、藩政改革を成功に導いた実務家でもあった。この実務での成功において、かれの学問がどの程度役に立っているのかというのは非常に興味深い点である。本稿の目的は、山田方谷の陽明学思想、特に気*の自然性に関し、形而前、形而後という観点から定式化し、それが藩政改革にどのように貢献したのかについて明らかにすることにある。

山田方谷が元締役として備中松山藩で実施した藩政改革についての分析はすでにいくつか存在している。たとえば、樋口は学問と藩政改革との関連性について「誠意中心主義」というまとめ方をしている。¹⁾ 確かにこの「誠意中心主義」により藩の粉飾決算を正し、それを債

a 神戸大学大学院経営学研究科, harada@people.kobe-u.ac.jp

権者である大坂の両替商に公開したことなどはその現れである。しかし、誠意中心主義の現代的意義を明らかにするためには、その用のあり方をさらに究明する必要がある。たとえば、方谷は借財整理に関し「借財蕩平論」を著し、借財に義の有無、由縁の「邪正」「虚實」「廉貪」の区別をし、各々に応じて異なる償還手段を取るべきと主張している。³⁾そこには誠意中心主義の具体的な用として、名実一致を厳しく問う姿勢がある。ここに「形（制度、仕組み等）」の前後における整合性を問題にしている視点が見られる。

つまり、山田方谷は現実における「形」と「勢い」を重視し、そこに改革（工夫）の焦点をおいたのではないだろうか。本稿では、改革という「形」が設置される前の意図、目的を形而前、「形」が導入され、それが関係者に及ぼす勢いを形而後という言葉で表現する。⁴⁾山田方谷は形而上を拒絶し、形而下における形の前後における気の勢いの整合性を問題にし、それを中心とした改革を実施した点にかれの思想の独自性および実務的成功の鍵がある。山田方谷が重視する「気其自然性」や「絜矩の道」とは、形而前後における「勢い」の一貫性、整合性のことを指すというのが本稿の基本的な主張である。

2 気其自然性と形而上的理の解体

山田方谷は『師門問辨録』にて「気生理」を主張し、それは王陽明の「気中条理」にもとづくと言っている。かれは徹底して気から離れた形而上的理を拒絶し、気が特定の形態をとった場合が条理になると語る。そして朱子学で取り上げられる「理」には「思索構成」の弊があると批判する。⁵⁾

方谷はこのような人為的に思索構成された形而上的理を拒絶する。形而上とは『易経繫辞上传』にある「形而上者謂之道、形而下者謂之器」を根拠とする。すなわち、形而上とは現象の根源を指し、形而下とは現象世界を指す。現象の根源とは無極、太極、太虚、渾沌などと呼ばれるものであり、時処位を超越する。この分類基準によると、朱子学は形而上的理の実現に向けて現実に努力する中間者を捉えている。⁶⁾一方、王陽明や王龍溪における形而上的理とはあえて表現すれば無善無悪であり、それが理一分殊するというよりも、時処位において時中する「状況の理」をその場その場に応じて創造していくことが求められる。⁷⁾山田方谷も、朱子学が性理を形而上のものとしていることを批判し、形而下においてはじめて性理を主張することができるとする。つまり、かれは形而上的理を解体し、「状況の理」を現実性においてのみ回収していると言えるだろう。

もちろん、方谷の主張する本体としての誠意は、その内実は時処位で変化するものの、形而上的理として解釈することもできるかもしれない。しかし、ここでいう形而上的理の解体とは、その實在性の否定を意味する。それは現実性における「状況の理」としてのみ顕現する。換言すると、形而上的理を源泉として事が現れると見るのではなく、事の内に理を見て、

事のあるべきように対処するということである。

方谷は次のように語っている。「先生嘗テ本體ノ體用ヲ論ジテ及門ノ諸子ニ示シテ曰ク、本體ハ物無シ。此レ其ノ已発ノ用ヲ除却シテ、未発ノ體アラザル所以ナリ。夫ノ本體ヲ認メテ一大物ト為スガ若キハ其ノ惑更ニ甚ダシ⁸⁾」。方谷は、「本體ハ物無シ」とする。「其ノ已発ノ用ヲ除却シテ、未発ノ體アラザル所以ナリ」というように、已発の用において未発の体と呼ばれるものが確認できるにすぎず、已発の用を離れて未発の体といったものは実在しないと主張する。かれのいう「未発ノ體」とは無善無悪であり誠意になる。後述するように、方谷の無善無悪とは形の不在を指し、そこにある至善が誠意となる⁹⁾。しかし、この誠意はもはや所以然の故といった普遍的、形而上的理ではありえない。誠意は気の条理であり、それは時処位においてのみ現れる。

「氣運ノ命ハ変化遷轉シテ一定ノ則無シ。只ダ其ノ変化ニ随テ条理ヲ生ズ、即チ是レ義理ノ命ナリ。別ニ義理ノ命アルニ非ザルナリ¹⁰⁾」。つまり、この気の条理は状況に応じて変化し、そこに一定の法則はなく、気の状態によって変わりうる「状況の理」である。それは自然法則ではなく、時処位の事においてあるべき状況、それを実現するために為すべき行為を意味する。この「状況の理」は、事から乖離した抽象場ではなく、あくまでも具体的、特定のな場においてのみ成立する。それを良知により「知覚感応」していくことが致良知であり格物となり¹¹⁾、この用において「自然の誠」は顕現する。

この状況の理は言うまでもなく気から構成され、時処位における気特定の状態を指している。方谷の陽明学理解では、良知の「良」とは「自然」のことであり、「自然」とは「気の執滞」がない状態を意味する。そこに形而上的理という「思索構成」の弊は見られない。方谷は次のように語っている。「良知ノ良ハ善ノ謂ヒニ非ズシテ、自然ノ謂ヒナリ。此ノ氣此子ノ執滞ナク。自然ニ感発スル者之ヲ良知ト謂フナリ、故ニ良知ハ善ニ必スル者ニ非ズ。只ダ人ニ在リテハ即チ善ノミ。夫ノ豺狼ノ人ヲ害スル如キ、豺狼ニ在リテハ則チ良知ナリ¹²⁾」。ここで注目し値するのは、「気の執滞」は形気によって異なるという点である。山犬や狼が人に噛みつくのはかれらにとっては本能的で自然な気の流れであり、良知になる。しかし、人間にとっては獣に襲われるのは不自然であり、人間の良知はそれを善とは判断しない。この場合の「状況の理」とは、獣の襲撃から身を守ることであり、獣の良知にしたがうことではない。

ここから示唆されるのは、形気に応じてそこから派生する働き、作用、勢いは異なるという点である。故に、獣という形気においては人を襲うという本能的働きが生じ、人においてはその攻撃から身を守るという作用が生み出される。つまり、形が勢いをもたらすのであり、この形と勢いとの関係性こそ方谷の主張する「自然」を理解する鍵があるように思われる。

3 形而上下から形而前後へ

良知の「良」を意味する「自然」とは具体的には何を指すのだろうか。方谷は「意の出づる處是を自然と云ふ、即造物者の物を造る始めなり」¹³⁾、「誠は即ち自然なり」¹⁴⁾、「太虚のままに行けば即ち自然」¹⁵⁾と定義しており、いわゆる太虚から生じるものが自然であり、それをそのまま踏襲すると誠になる。具体的には「一大氣の天が形を生じ結んで性と云ふなり。火が燃え水が流るゝ如く、形に直ぐ自然の性あり。故に性は形の自然なり。作爲するものに非ず。……其の形の性根なりにすなほにこしらへ事なく、自然に行くを道と云ふ」¹⁶⁾。つまり、自然とは「形の性根」に作為なく「すなほにこしらへ事なく」したがうことを指す。これ以外に「自然」を敷衍した表現を取り上げるとすれば、「気の執滞」がない「自然ノ感発」であり、「事の外に立ち、事の内に屈せず」ということになるだろう。

しかし、具体的な状況下での「気の執滞」はどのように評価することができるのだろうか。それは「すなほにこしらへ事なく」「思索構成」がないということであり、宮城（2004）によれば「無意識・無作為の自然」¹⁷⁾となる。宮城は、王陽明の致良知においては、格物致知の工夫において「善を善として意識して為し、悪を悪と意識して去る」という意識的プロセスを認め、そこに「無意識・無作為の自然」からの乖離を指摘している¹⁸⁾。けれども、「事の外に立ち、事の内に屈せず」という工夫は、果たして純粋な無意識的・無作為的感応のみで対処できるものなのであろうか。山田方谷の藩政改革が、無意識的・無作為的な知覚感応だけで遂行されたものとは到底考えられない。思索構成の弊を指摘するのは問題ないにしても、気の自然性、誠の自然を無意識性、無作為性に求めるのは、方谷の藩政改革を理解するうえでは障害になるように思われる。

方谷の「自然性」を理解するうえで重要なのは、無善無惡に対するかれの評価である。「先生又曰ク、善無シ惡無シハ、天地ヨリ言ヘバ則チ未ダ形氣アラザルノ前ナリ。人心ヨリ言ヘバ、則チ未ダ事物ニ感ゼザルノ前ナリ」¹⁹⁾。つまり、方谷の理解する無善無惡とは、形が生まれる以前のことを指す。かれは形而上的世界の存在を否定する立場にあるため、これは形気の根源的世界を意味するのではなく、形気が生み出される以前の現実性での状態のことを意味する。本稿ではこの形気生成以前を「形而前」と呼ぶことにしよう。「上」ではなく「前」であり、これは「上」が示唆する超越性ではなく、時間的先行関係における「前」を意味する。問題となる形気が生成する以前には当然ながらその形気は存在していない。したがって、それは実在しないため善でも悪でもない。この現実性における「形而前」が無善無惡の意味するところである。

ただし、形が生成する以前であっても、形而前には無形の勢い、作用、働きがある。花や草木の形而前は種子であり、そこにはDNAという形で草花の原型、遺伝情報が存在してい

る。人間がつくる形、たとえば制度、政策の場合、それが定式化される以前には何らかの目的や意図が存在する。したがって形が不在であるという意味ではその形の働きは無善無悪であるが、しかし形面前においては意図、志、目的、方谷の場合では誠意が存在する。これらを総称して「形面前」における「勢い」と呼ぶことにしよう。

一方、形が形成されれば、そこからは形の後、すなわち「形而後」となる。「形而後」は形から派生する勢いが生じ、「形面前」の勢いとの整合性が問題となる。そこに整合性、一貫性があれば善であり、そうでなければ悪となる。この点で方谷は次のように語っている。「夫レ形氣ニ自然ノ順逆アリ、而ル後善惡ノ名アルナリ。蓋シ耳ノ形氣ハ自然ニ能ク聞ク、耳ノ善ナリ。……耳目手足ノ形氣ニ一毫ノ障礙アラバ。則チ聞見持行ノ自然ニ非ズ、此レ耳目手足ノ惡ナリ。故ニ善ノ名ハ障礙ノ惡アルニ對シテ之ヲ善ト謂フノミ」²⁰⁾。ここでいう「自然ノ順逆」とは、形面前、形而後の勢いの整合性、一貫性のことである。目耳鼻などの感覚器官や生物の本能的な行動は、生命体のもつ自然な勢いであり、それは遺伝子情報に組み込まれた通りの動きをしているかぎり、形面前後の勢いは整合的である。人為性、恣意性のない領域では、基本的に形面前後の勢いは整合的であり、それはある意味では自然法則にしたがっているということができる。

しかしながら、人為的な動き、たとえば政策、制度設計の領域では、形面前後が整合的である保証はない。特定の制度から派生する勢いは、氣の執滞がなく、自然の流れであるかもしれない。しかし、この意味での自然な流れとは、「事の内」における自然であり、場合によっては方谷が理想とする自然ではない可能性もある。「事の外に立ち、事の内に屈せず」ということが求められるからだ。たとえば、方谷は次のように述べている。「形があれば是非出来そこなひあつて、形の自然、性根通りゆかぬことあり。此れ亦自然なり。……一氣通貫なれば、同じく人にして、性の儘に行く人より、性に違ひ出来そこなふ人を見れば、修復せねば打ち捨て置かれぬ、此れ教なり。出来そこはひの人も、自ら修復せねば置かれぬも亦同²¹⁾じ」。形の自然、性根通りにいかないことがあってもそれは自然であるという。しかし、これは「一氣通貫」の自然ではない。この「出来そこなひ」を修復することこそが一氣通貫の自然ということになる。

ただし、ここでの形は所与のものである。それに対し、藩政改革では、自ら形、すなわち制度、仕組みを作り出さなければならない。したがって、形が創出される前後でのその働きの整合性を維持することが自然の具体的な定義になるのではないだろうか。「事の外」というのは形面前の勢いであり、事の内に屈せず、その形面前の意図、目的と整合的な形而後の勢いを生み出す制度・政策が設計できれば、形面前後の整合性は取れたことになる。もしそこに不整合なところがあれば、それは「出来そこなひ」「氣の執滞」であり、修復されなければならない。これが「教」となる。つまり、氣を自然にする工夫とは氣の執滞を是正する

ことであり、それは具体的には形而前後の不整合な部分を正すということを意味する。本稿で主張する形而上的理の解体とは、より具体的には、形而上下から形而前後への理の転換のことに他ならない。

この点で山田方谷の陽明学とは決して動機主義ではないことがわかる。動機が良知にもとづいているのであれば結果は問わないとするのが動機主義であるとするならば、形而後を語る必要はなく、形而前の動機だけを問題にすればよい。その動機が誠であるかぎり、いかなる行動、形も正当化されることになる。このような動機主義は、直情的、原理主義的行動に結びつきやすく、しばしば陽明学の弊害として指摘される狂狷を生み出す。しかし、これは陽明学に関する誤解にもとづくものと言わざるをえない。というのも、陽明学における理とは具体的には「状況の理」であり、形而上的理のことではないからだ。状況が変われば当然ながら「状況の理」も変わる。行動すれば状況は変わり、その行動が「状況の理」を踏まえていなければ状況は悪化し、異なった「状況の理」が新たに求められる。このように「状況の理」を問題にしているかぎり、事を正す格物は一回かぎりの単発的行為などではない。むしろ、「状況の理」と行為には無限の相互作用が求められる。そのなかでは、当然ながら「状況の理」を正しく捉えていないという過不及も生じるだろう。行動自体、形であり、形而前、形而後の整合性が問われる。そうであるからこそ、王陽明が説くように、心が真実切実であれば善を見てはすぐ遷り、過失があればすぐ改められ真実切実の修行になる。²²⁾

なかでも、方谷においては形が重要であり、形のもつ勢いが自然、すなわち形而前の意図と整合的かどうか問われることになる。その意味でこれは純粹な動機主義ではなく、事後的な対応を重視し、「気の執滞」を見つけてはそれを是正していくという点では形のもたらす帰結こそが工夫の場になると考えられる。これに関連し、方谷は次のように語っている。「人ニ在リテモ亦タ聖賢各剛柔ノ別アリ、一定ノ気ニ非ズ。唯ダ其ノ気ノ自然ニ順ヒ、些子ノ執滞無クバ、即チ条理自ラ生ズルナリ」²³⁾「然れども物の形に落つると是非病を生ずるものにて、自然なに行かぬこと多し、是は形から病を生ずるなり。故に形より来る病をとりのくれば、本の太虚自然に反り、即誠意なり」²⁴⁾。

陽明学を狂狷から分かつのは、この形而前後の勢いの整合性を維持するための継続的相互作用プロセスを実行していくか否かという点にある。

4 藩政改革と絜矩の道

形而前の勢いとは目的、志であり、誠を意味する。この誠を形而後も貫くことが気の自然性となる。前節ではこれを形而前後の整合性を維持することであると指摘した。山田方谷の藩政改革においては、この整合性は絜矩の道に該当する。

「凡そ大學の極意即基本を云へば誠意なり。末の廣がりたる處を言へば平天下なり。故に

此章は上の誠意より能く貫きて見ざる可からず。されば此一章の平天下は大なる事に相違なきも、其中絜矩の道が大切にて、是が又財用を取り扱ふと人を選び用ふとの二者に帰す。凡そ古今の事、此二者より大切なるはなし。其他万般の事皆此中にあり。而して此二者は絜矩より来る²⁵⁾。つまり、誠が平天下において形となったのが財政であり、人材の登用となる。そして、誠と財政、人材登用を結びつけるのが絜矩の道となる。絜矩の道とは、言うまでもなく、「大学」で主張されている主要概念であり、上下左右の基準を同一にし、上の悪は下に仕向けず、下から受けた好ましくないものは上に向けないということを意味する。現代的に表現すれば、ゼロサムゲームをポジティブサムゲームへと転換していくことを意味するものと考えられる²⁶⁾。この絜矩の基準を維持することが形而前後の整合性であり、財政や人材登用という具体的な形（政策・制度・運用）を評価するときのポイントになる。「苟も絜矩に因り財用を制すれば、争も奪も起らぬものなり²⁷⁾」²⁸⁾、「絜矩の人が用ふる人は皆絜矩に適ふ人なり²⁸⁾」となる。

したがって、財政、人材登用という具体的な制度設計においては、絜矩の基準が形而前後の整合性に該当するものであり、この基準が一貫していれば問題は生じない。この絜矩の基準は財政という制度的な形に対し、その形の用としてさらに具体化される。「要するに生ずると食らふと、爲くると用ふると、いつも對照して總勘定を立て、總會計をなさざる可からず。……さて以上の大筋を立てるが大道にて、大會計なり。天下の公を忘れ、一己の私をなすやうでは、此の大會計は成し遂げらるべきに非ず。上の人利を計れば、民も亦利を計る²⁹⁾」。財政においては歳入と歳出を比較し、財を生ずることを奨励し、支出を抑えることにより財政は豊かになり、藩や民は共に潤う。方谷は歳入を増やすのに農民が第一となるが、「其他萬づの業とする者皆寛容なり。而して其財は天下に廣めて天下萬民の用をなすに非ざれば、眞に財を生ずるに非ず。同じく生ずるにても、天下の爲に生ずると、一己の爲に生ずるとの別あり³⁰⁾。」と解説する。つまり、歳入においても絜矩の道が重要であり、誰かが富を占有しようとする最終的には財を増やすことにはつながらない。

実際、山田方谷が行った藩政改革の要点は、経済政策というよりも、藩経営の改革だったと言える。つまり、藩を一つの事業体としてみた場合、かれはその経営を革新していった。具体的には、撫育方を創設し、そこで鉄山・銅山を藩直轄事業としてその経営に注力し、備中鍬や鉄釘などの新製品を開発し、江戸へと海路で直接輸送し、消費者に直販に近いかたちで販売していった。さらに、ファイナンス機能として、信用力の落ちた藩札を刷新（これは現在では社債の格付け向上に該当する）することで資金調達力を高め、大阪の蔵屋敷を廃止し、そこで備蓄されていた米、いわば金融資産について、撫育方で米の売買を通じて資産運用益を獲得していった。いわば生産から販売、ファイナンスまで撫育方で担当する一気通貫のビジネスモデルを構築し、そこで収益をあげたことが財政改革のポイントであった。それ

と同時にいわゆる従業員福祉政策として社倉法を適用し、備蓄米（粃）を藩内四十カ所に新たに設置した貯倉に蓄え、飢饉があればそこから民に米を支給することで餓死者を出さないように施したのである。

すでに指摘したように、先行研究ではこれを誠意中心主義とのかかわりで議論されることが多い。しかし、その誠意は実在するものではなく、あくまでも具体的な格物、その用において顕現し、その用のあり方を議論しなければ抽象的にとどまる。したがって、形而前の誠意と形而後の改革をつなげる絜矩の基準を方谷が徹底した点を強調する必要があると思われる。

まず藩専売制度、撫育方が確立される以前では、他の諸藩と同じく農業経済に依拠した藩財政であり、経済における商活動の比重が飛躍的に上昇する商品経済のなかで農業収入では藩の支出が支えられない状況にあった。撫育方設置以前はそのような状況であり、藩財政改革という事の外に立ち、その形而前の意図としては、農業に代わりうる事業活動の創出があったと考えられる。具体的には鉄山・銅山を基盤とした事業活動であり、藩自らが経営に積極的に関与していくという点では田沼意次の重商主義的政策とも一線を画すものであった。この時期は米国ではいわゆるビッグビジネスが成立する前の萌芽期にあった。それとほぼ期を同じくして、藩という事業単位におけるビッグビジネスの成立を認めることができるのではないか。これは「農民が第一なれども、其他萬づの業とする者皆寛容なり」を実行したものと考えられる。年貢を取り立てるだけでは農民が益することはない。しかし、ビジネスとなれば、備中鍬などの生産・販売は、生産・販売者のみならず、それを購入する顧客の益にもなる。これは明らかに絜矩の基準を満たしていると言える。ここに山田方谷による藩政改革の経済史的、経営史的なポイントがあると考えられる。

方谷は、藩主導のビッグビジネスを確立し、商品経済ベースの財政改革を推進していった。藩政改革という事の外に立ち、具体的には七大政策という形を提示し、その形而前後の勢いの整合性、すなわち絜矩の基準を満たしていったのである。それは必ずしも既存の事の内からみれば気の自然ではなかった。封建的身分制度という事の内においては、武士とは商活動に従事するものではなく、農本主義にもとづく財政に依拠すべきという規範があった。これらの形を踏襲した財政改革は、基本的には百姓の犠牲（年貢の負担増）のもとに成立するものであり、絜矩の基準に矛盾する。方谷は、藩によって事業活動を積極的に実施し、収益を生み出していくという方向に改めたのである。

ただし、それは封建的身分制度という事の内には固執していた（「絜矩の人」ではない）多くの藩士においては決して自然なものではなかった。故に、方谷は「事の外に立ち、事の内には屈せず」と主張する必要があったのではないだろうか。つまり、ここでの「事の外に立つ」とは、財政改革における絜矩の道を具体的に意味したものと考えられる。この絜矩の基準こ

そが、形而前後の勢いの整合性を評価する具体的な基準であり、方谷による藩政改革の鍵だったと考えられるのである。

注

* 本稿は JSPS 科研費 19H00597 の助成を受けて進められている研究の一部である。難波征男先生（福岡女学院大学名誉教授）からは貴重なコメントをいただいた。ここに記して深謝する。

- 1) 山田方谷の藩政改革を分析したものとしては、樋口公啓『山田方谷の思想と藩政改革』（明徳出版社，2011年），野島透『山田方谷に学ぶ改革成功の鍵』（明徳出版，2009年），三宅康久『山田方谷の藩政改革とその現代的意義』（大学教育出版，2011年）などがある。
- 2) 前掲樋口『山田方谷の思想と藩政改革』（36頁）。
- 3) 山田方谷「借金蕩平論」（山田準編『山田方谷全集（2冊）』（明徳出版社，1951年））1313頁。
- 4) 戴震は「形以前」「形以後」という言葉を似たような意味で使用している。ただし，戴震の「形以前」は価値的意味を意図的に排除している。しかし，本稿では形以前の価値こそを重視しているため，この点で大きく異なる。村瀬裕也『戴震の哲学—唯物論と道徳的価値—』（日中出版，1984年）を参照。
- 5) 『師門問弁録 訳文』（前掲『山田方谷全集（2冊）』）857-858頁。
- 6) 荒木見悟『新版仏教と儒教』（研文出版，2013年）を参照。
- 7) 宮城は「状況の理」は山田方谷の師である佐藤一斎における理にもみられるとする。宮城公子『幕末期の思想と習俗』（ぺりかん社，2004年）178頁。
- 8) 『師門問弁録 訳文』（前掲『山田方谷全集（2冊）』）846頁。
- 9) 「至善とは，何物もなき太虚の處にて，無善無惡の時なり。故に此至善は，未だ意の発せぬ前なり，其至善の場より流出し來るものは皆善なり」（『古本大學講義』前掲『山田方谷全集（1冊）』）617頁）。
- 10) 『師門問弁録 訳文』（『古本大學講義』前掲『山田方谷全集（2冊）』）846頁。
- 11) 前掲宮城公子『幕末期の思想と習俗』122頁。
- 12) 『師門問弁録 訳文』（前掲『山田方谷全集（2冊）』）850頁。
- 13) 『古本大學講義』（前掲『山田方谷全集（1冊）』）615頁。
- 14) 『古本大學講義』（前掲『山田方谷全集（1冊）』）633頁。
- 15) 『古本大學講義』（前掲『山田方谷全集（1冊）』）633頁。
- 16) 『中庸講義録』（前掲『山田方谷全集（1冊）』）673頁。
- 17) 前掲宮城『幕末期の思想と習俗』127頁。
- 18) 前掲『幕末期の思想と習俗』119-120頁。この宮城の指摘は必ずしも正しいとは言えない。というのも，未発の体である無善無惡が心の動たる意において時処位に応じた至善が創出されるのが王陽明の主張する致良知であり，「既成の善惡の価値にとらわれ，人間性の自然が失われている」という主張は成立しないからである。
- 19) 『師門問弁録 訳文』（前掲『山田方谷全集（2冊）』）850頁。
- 20) 『師門問弁録 訳文』（前掲『山田方谷全集（2冊）』）855頁。
- 21) 『中庸講義録』（前掲『山田方谷全集（1冊）』）673頁。

- 22) 近藤康信『新釈漢文大系13 伝習録』(明治書院, 1961年), 147頁。
- 23) 『師門問答録 訳文』(前掲『山田方谷全集(2冊)』) 850-851頁。
- 24) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 616頁。
- 25) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 652頁。
- 26) ゼロサムゲームとは, 一方が利益を得れば, 他方が損をし, プレイヤーの利得の合計はゼロになる状況を指す。ポジティブサムゲームとは, 各プレイヤーが各々利益を得るため, その利得の合計はプラスになる。
- 27) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 657頁。
- 28) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 660頁。
- 29) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 664頁。
- 30) 『古本大學講義』(前掲『山田方谷全集(1冊)』) 664頁。